

概要報告

実施期日	令和8年8月3日(月)
部会名	小学校 体育部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善(含む個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実)

テーマ

『自ら学び挑戦する子を育てる体育の学習』

提案概要

小学校体育において、高学年へと進級するにつれて「運動への苦手意識」や「失敗を恐れて消極的な姿勢」が見られるようになる課題がある。本実践は、こうした高学年期における課題を未然に防ぐため、低学年の段階から「自分で選択・工夫し、試行錯誤を重ねて『できた』という達成感を実感する体験」を積み重ねることを目的とした。提案者は、低学年における「挑戦」を単に高難度の運動に挑むことなく、「自分なりに考えて一步を踏み出し、その結果をもとに学び方を見直したり、より良い方法を試したりすること」と定義した。そのうえで、児童一人一人が自分に適した場や動きを選択する「個別最適な学び」と、友達の動きや考えを取り入れて動きを改善していく「協働的な学び」を一体的に充実させる授業づくりの方向性が示された。

【実践の概要】

児童が運動に没頭できるよう、1年生に親しみのある「ごっこ遊び(お話の世界)」の要素を取り入れた単元が構成された。体育館内には「あおむし」「サンタ」「忍者」をテーマにした3つの場が設定され、以下の通り段階的なアプローチが展開された。

- ・第1次(2時間): 教師が設定したストーリーに没入し、夢中になって運動遊びに親しむ。
- ・第2次(2時間): 「もっと楽しくするには」という問いかけから児童の考え(難易度変更や配役など)を募集・反映させ、自ら遊びを作り替える中で多様な動きを引き出す。
- ・第3次(1時間): 他クラスが作成した場で遊び、多様な動きへの挑戦と経験を広げる。

【成果と課題】

- ・成果: 事後アンケートで運動を好む児童が増加した。さらに「ゆっくり動くと上手いく」など、他者比較ではなく過去の自分と照らした成長の実感や、自己調整を図る姿が見られた。
- ・課題: 指導者が高学年での指導経験から、無意識に技能の習得(上手になること)を直接求めてしまいそうになった点が振り返られた。低学年では「どうしたら楽しくなるか」の追究により、結果として運動の質や量が向上するという本質が再確認された。

質疑応答

- 質問: 1年生2学級合同(約60名)での実施にあたり、設営準備や安全配慮、時間の確保はどのように行ったか。
- 回答: 準備は、休み時間等を活用し、体育の時間を連続させる時間割配置により教員側で約10分の時間で設営した。片付けは、児童と協力し、約5分で完了させた。安全対策については、コースの横切り防止や、前後の間隔確認を指導した。また、マット配置の工夫等により衝撃緩和を図り、ケガなく安全に展開した。

協議の柱及び協議概要

【協議の柱1】:「やってみたい」を引き出す場や教具の工夫・教師の関わり

児童がお話の世界に入り込むことで、「ただ楽しく動く」だけでなく、「どうすればもっと面白くなるか」を自然に考え、コースや教具を自ら工夫する姿が印象的であったという意見が多く挙がった。また、60人という大人数での合同体育であっても待機時間が少なく、児童が何度も繰り返し挑戦し続けられる環境が整えられていた点が高く評価された。

【協議の柱2】: 自ら課題を見付け、試行錯誤しながら運動に取り組むための手立て

一人一台端末の活用も一つの手立てとして話題に上がりつつ、児童自身が自分の動きを振り返り、「次はこうしてみよう」と動きや場を選び直すこと（自己調整）を大切にする工夫について話し合われた。低学年の体育においては、「運動が上達したか」ということ以上に、「多様な場や遊び方の工夫を通して、自ら試行錯誤しながら体を動かせたか」という経験そのものを重視し、評価していく姿勢が大切であるという考えが全体で共有された。

まとめ概要

本実践は、お話の世界に入り込んだ児童が、体育館に足を踏み入れた瞬間から「やりたい」という意欲をあふれさせ、進んで運動に向かう姿が見られた授業であった。単に提示されたコースをなぞるだけでなく、「もっと楽しくするにはどうしたらいいか」という問いかけに対し、児童が「もっと山を高くしたい」「狼役を作りたい」といったアイデアを次々に出し、それを実際に場に反映させた点が児童の主体性に結び付いていた。この関わりによって、体育の時間が単なる「与えられた遊びをこなす場」から「自分たちで工夫して作り替える場」へと変わり、児童自身が授業を構成していく主役となっていた。また、自分の動きを言葉にして振り返ったり、友達の優れた動きや工夫を模倣し、試行錯誤したりする「学びを自己調整する姿」が、小学校1年生という段階から見られた点は大きな成果である。毎時間の授業全般を工夫することは困難を伴うものの、単元の展開の一部や児童の考えを取り入れる指導の手立ては、今後の授業改善において重要な示唆を与えるものである。低学年のうちから自ら課題を見付け、試行錯誤しながら運動の楽しさや達成感を味わう体験は、小学校から中学校までの9年間を見据えた運動の基盤となり、将来の運動習慣の確立にとっても不可欠なアプローチであると評価された。